

## 資料A - 2

ふるさと文化賞 一船大工 湊隆司さん

第21回(平成14年度)  
ふるさと文化賞受賞

船大工湊隆司さん

和船を建造する確かな腕が

華麗な船祭りの伝統を守る

昭和3年赤穂市坂越生まれ。昭和20年播磨造船徒弟学校卒業後、坂越・明石・家島の造船所で船匠を経験し、昭和31年に坂越で浜棟梁として独立、現在に至っています。和船、機帆船新造・修理の腕を磨き漁船だけでも260隻以上を新造。坂越の大避神社の船祭りをはじめとする祭礼用の和船の修理も一手に引き受けると同時に、楽船・御輿船・歌船などの復元船の新造や、模型船の制作をし、和船の技法の保存と継承に努めています。

昭和59年赤穂市選定保存技術者、平成12年赤穂市文化振興賞受賞。

赤穂市在住。74歳

赤穂市立歴史博物館の一階に大きな帆船が展示してあります。江戸から明治にかけて赤穂特産の塩を運んだ塩廻船の模型「赤穂丸」です。見事な帆船ですが、これでも実物の三分の一の大きさだとか。この帆船模型を作ったのが、船大工の湊司さんです。「父親も船大工でした。私は工作が好きで学校から帰ってくると、のこぎり持って父の仕事を手伝ってました。その父が終戦直後に亡くなり、私も船大工になる決心をしました。なんぼ父親が腕のいい浜棟梁でも、子供に腕がなかったら仕事もらえんのが職人の世界ですから、私は知り合いの造船所に弟子入りして腕を磨くことになりました」浜棟梁とは船主の注文を受けて、船材木の購入から、設計施工、船大工の采配などを一手に引き受ける、いわば造船の総責任者です。浜棟梁になるには十年に及ぶ厳しい修行が必要でした。「弟子になってからは、腰掛けてご飯を食べたことはありません。足元の木片にけっぱずく(けつまずく)と『足にかかった木は、今作っている船のどこに持って行ったらええか考えろ、頭を使うんや』と怒られました。仕事はまったく教えてもらえません。人の仕事を見て覚えるんですわ。『技術は盗むもんや』が棟梁の口ぐせでした」

最初の造船所では和船や機帆船づくり、その後働いた明石や家島の造船所では漁船づくりの腕を磨いた湊さんは昭和三十一年に坂越にもどり浜頭領として独立しました。「船の各部は直角になっている部分がほとんどないんです。すべて斜線・斜面の組み合わせです。高い技術がいります。なかでも船大工の急所は『鋸摺り』ですわ。まず最初に甲羅(船底板)を何枚か、あわせて船底を作りますが、つき合わせる部分に摺り鋸を入れて、細かくそげ立てるんですわ。接着剤なんかなかった時代の接合法で、乾燥した木の断面をざらつかせて、ぴったりとあわせ、水を吸収したときに一枚の板のようにするんです。これで船の浸水を防ぎわけです」鋸摺りのほかにも、「焼き矯め」と呼ばれる技術は船特有の側面のカーブをつけるために、火と重石を使って材木を曲げるもので、経験とカンとコツと細心の注意が要求されるのです。

<http://hyogo-arts.or.jp/hpnt/arts/ken/ken19-4.htm>

2016/06/14

こうした努力と功績が認められ、湊さんは昭和五十九年赤穂市選定保存技術者(市文化財)に認定されました。湊さんの地元坂越で毎年十月に開催される大避神社の船祭りは、何艘もの和船を使う勇壮な海上船渡御で知られる瀬戸内海三大祭りの一つで国の無形民俗文化財の指定を受けています。また、和船のうち楽船など六隻と船倉は県の指定文化財となっています。湊さんは、赤穂市で唯一の和船建造技術継承者として、これらの和船の復元や修理にも尽くしてきました。地元だけでなく、昨年には奈良の采女神社の「采女祭」に登場する管弦船二隻を湊さんが建造。九月に猿沢池で行われた祭りでは船上で雅楽が演奏されました。

「今では和船が一隻、一隻と減って行って、プラスチックの船ばかりになっています。せめて自分が手がけた和船だけでも形と技術を残していきたいと思って、仕事の合間に模型を作っているんです」

赤穂市立歴史博物館では、湊さんが制作した冒頭の「塩廻船・赤穂丸」のほか、一回り小さな帆船「上荷船」(三分の一)の模型も見ることができます。